空海の風景

下巻

司馬遼太郎

司馬遼太郎

空海の風景

下巻

中央公論社

空海の風景　下巻

昭和五十年十一月三十日初版
昭和五十一年二月十日九版

著者　司馬遼太郎

發行者　高梨茂

印刷所　株式会社精興社

製本所　小泉製本株式会社

發行所　中央公論社
東京都中央区京橋二―一
電話（五六一）五九二一
振替　東京二―三四

©一九七五　検印廃止

空海の風景　下巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

十六

この間、空海はインド僧を教師としてサンスクリット語（梵語）を学んだ、ということが、空海自身の文章（『秘密曼荼羅教付法伝』）にある。かれは日本人にして最初に、この印欧語の一派の、きわめて特殊な文章語を学んだということがいえる。

それを学んだのが恵果に会う以前なのか、会ってからなのか、それとも恵果が死んでからなのか、前後の時間関係がわからない。

推察するに、恵果に会う以前ではないか。

でなければならない理由はある。恵果に会ったときはすでに空海はサンスクリット語を理解していた気配があり、恵果自身が空海にすべての法を伝えおえたときのことばに、

「さあ、これでみな伝えたよ。瓶から別の瓶へ、水をぜんぶ移しきったようなものだ（猶、瓶ヲ瀉スガゴトシ）」

というのがあるが、そのことばの冒頭に、

「漢梵、差フコト無クシテ悉ク心ニ受ク」

とある。漢梵というのは単に言葉の綾でないとすれば、中国語による密教と原語であるサンスクリット語による密教、という意味であろう。

この恵果のことばは、空海が記憶し、のち弟子たちに語ったもので、『真言付法纂要抄』にある。同書にあってはこの言葉をさらに敷衍して説明し、「漢語とあわせ、梵語によって経典を読む必要がある。漢語のみで経典を読んでいるのは、たとえば女子などのための仮名書きのお経を読むだけで事を済ますようなものだ」と、書いている。

たしかにこの説明どおりで、空海が長安にあったころ、密教はインド人の手からはじめて中国人の恵果に渡された時代で、密教的思考のなかに原語が日常的に生きていたはずのときであった。密教を組織的にひき継ごうと志した空海が、伝法を受ける前に、サンスクリットを学ぶのは当然だったかもしれない。

とすれば空海が、長安に入って恵果に会うまでの五ヵ月、この都市の殷賑の中を浮かれ歩いていたのみではなかったといえる。むろん、浮かれ歩きはしたであろう。かれは最澄のように篤実であるには、あまりにも才華がありすぎたといえる。その才華は、文明という普遍的世界そのものといっていい長安の都市に適合しすぎるものであった。たとえば筆の店の軒下に立てば、良筆の見わけ方から筆の作りかた、ついにはその技術のこつのようなものまで学びとってしまうとい

った底のものであったし、また奈良の墨屋の「古梅園」の家伝を信ずるとすれば、墨屋の仕事場に入りこんで墨のつくり方まで会得してしまうところがあったし、その関心と吸収力の対象は、堰堤や橋梁から建築にいたるまでにおよんだ。さらにはその文章力はおそらくこの時代の長安でかれの右に出る者がいなかったことはまぎれもない。このため、大官などのサロンに招ばれて詩酒の席につらなる機会が多かった。

サンスクリット語を学んだのは、そういう長安の日々のなかにおいてである。

かれ自身が書いているところでは、醴泉寺（れいせんじ）へ行って学んだという。かれの教師のひとりである般若三蔵は、景教に触れたくだりで登場した。西胡（イラン）語で書かれた『六波羅蜜多経』が唐に入っていたのを、徳宗皇帝の命令で、般若三蔵が訳したのである。般若三蔵はイラン語がわからないため、皇帝は、ネストリウス派のキリスト教宣教師であるイラン人景浄に協力させた。景浄が下訳をしたところ、当然ながら、キリスト教の教義にひきよせて中国語訳した。般若三蔵は怒りだし、両人がいさかいつづけて収拾がつかなくなり、ついに徳宗の裁定を乞うた、という挿話である。その般若三蔵もすでに老い、七十を越えていた。

空海はこの般若三蔵から親しく語学をまなぶことに、当然、心がおどったにちがいない。空海は自分の思想の母国の僧からじかに、その思想を生んだ言語を学べるとは思いもよらなかったのではないか。

般若三蔵は、バラモン階級の出身であった。釈迦とおなじくちぢれた髪、長い眉、ふかく窪んで山中の沼のような光りをたたえた両眼、そして隆い鼻、おそらく整った風貌をもっていたであろう般若三蔵の表情のうごきや動作のはしばしまで空海はこまかく観察し、ただならぬ思いで接していたにちがいない。

「三蔵よ、あなたは天竺のどこにおうまれになったのです」

と、空海は質問している。かえってきた答えを空海はよく記憶し、のち『御請来目録』に書いた。般若三蔵は、カシミールの生れだよ、と答えた。若いころに道に入って五天（インド全土）を経歴し、やがて中国に法を伝えるべくやってきた、と言いつつ、

「私は日本にも渡りたいのだ」

と、いった。この時期のインド僧の意気を般若三蔵に見ることができるであろう。

ついでながらキリスト教の宣教師たちは神の言葉をつたえるために瘴癘の地をおそれず、行旅の艱苦に耐えて地のすみずみまで行こうとするが、この時期にかぎってはインド僧も少なからずその気概をもっていた。

このことに、すこし触れておく。インドにあってはのちに仏教が衰え、ヒンズー教という、普遍性をうしなった民族宗教が主力を占めるが、この時期にあっては、なおインド思想は普遍性という栄光を保っている。

受け入れる中国の側もこの時期ばかりは唐初以来、世界性にあこがれるところがあり、それが

インド僧の伝道の情熱を長安にむけることになったのであろう。もっともこのときから四十年後にはその歴史的気分が終熄する。武宗の会昌五年（八四五）の大規模な廃仏によって、たとえば恵果の住む青竜寺もほろぶのである。般若三蔵の伝道上の気勢（きおい）というのは、アジア史におけるきわめてわずかな時間における光芒というべきものであり、般若三蔵が、日本の島々にも人類がいる、人類がいるかぎり私の法は通用するのだ、そのためにゆきたい、というのは、普遍的思想というものに照らされた者以外に理解することができないに相違ない。若い空海は般若三蔵がもつそういう磁場のなかにいて当然、磁気を帯びたであろう。ひるがえって想うと、空海という存在は、東海の島の国のながいその後の歴史において、地域的人間関係や地域的事情に拘束されることなく、人類そのものに直接通用するただひとりの思想的存在でありつづけているというふしぎさは、たとえば般若三蔵のような人物の精神に触れたことも、その小さくない成立理由のひとつかもしれない。

空海はのちに――恵果と会ってから――青竜寺に住む曇貞和尚からも悉曇（シッタン）を学んだ、としばしば謂われる。筆者もまたそう信じていたが、これについては宮坂宥勝博士の精密な考証があり、空海入唐（にっとう）のころには曇貞は故人であることを知った。しかし察するに、長安には曇貞を学祖とする悉曇学の権威たちがいたであろう。空海は、そういう人、もしくはそういうひとびとに就いてこのインドの語学をまなんだかとおもえる。

悉曇とは、もともとはサンスクリット語の字母のことを指す。しかし空海が学んだというこの場合は、字母の書法だけでなく、サンスクリット文法学をも含めた意味と思われる。サンスクリット語世界は、当時の貧困な日本語世界からは想像もできないほどに、言語そのものが大きな文明を為しており、ふるくから言語哲学が発達し、さらに文法学の伝統があり、聖語であるサンスクリットが、すべての宇宙のなりたちと動きに対応するものであるとされていた。インドではこの言葉が形而上的世界（梵）のための言葉であるとし、生きた日常語でないがために聖なる語であるとされてきた。

インドにおいては、その後の人類が持ったほとんどの思想が、空海のこの当時までに出そろってしまっているが、それらの思想は、当然、言語に拠った。厳密に整理され、きびしく法則化されてきたサンスクリット語によって多くの思想群が維持され、発展してきたが、空海がすでに日本において学びつくした釈迦の教えやそれをささえているインド固有の論理学や認識学も、さらに蘊奥を知るには中国語訳だけでなくこの言語に拠らねばならない、ということは、インド僧だけがそういうのでなく、インド的体温のまだ冷めないこの時代の唐の仏教界では中国僧もそう思っていたにちがいない。このため、恵果も、空海に対し、「お前さんは、漢も梵も差うことなく心に受けた人だ」といったのであろう。恵果も、その師であるインド僧不空からサンスクリット語の承け継ぎを十分にやった僧である以上、その恵果が空海に、漢も梵もたしかなものだ、というかぎり、空海のサンスクリット語やその言語哲学というのは、ほぼ十分なものであったに相違

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ない。

それを、空海が長安に入ってわずか五ヵ月で習得したというのは、うごかしがたい事実であるように思われるが、しかしそれほどの頭脳が、この世に存在するだろうか。実際にはかれが日本において、――つまりかれが大学を飛び出してから三十歳になるまでの年譜上の空白時期に――何者かに就いて学んでいたかとおもえたりもするが、この想像には、証拠も傍証もない。空海はあるいはそういう奇蹟をやってのけたかもしれず、あるいは恵果はその筋からも空海の異能をきいていて、「われ、先より汝の来るを待つや久し」といったのであろうか。

空海は、梵語の教授を般若三蔵一人からうけたのではなく、般若三蔵とともに醴泉寺に住している牟尼室利三蔵にも就学した。このことは、かれ自身が書いた『秘密曼荼羅教付法伝』に出ている。ただし牟尼室利は空海に会った翌年の六月に病没する（『宋高僧伝』）。空海の文章では醴泉寺においては般若三蔵との接触のほうがより濃厚であったかのような感触が感じられるが、これは牟尼室利三蔵の体力が衰えていて、十分に空海の相手をすることができなかったのであろう。

「日本にゆきたい」

と、般若三蔵が空海にいったものの、しかし「東海ニ縁無ク、志願遂ゲズ」要するに、船の便もなく、船だけでなく縁が熟さないために志を遂げるに至っておらぬ、という。

「であるから」

と、般若三蔵は自分が訳した経典類を空海の前に運んできて、「これをお前に贈る。帰国するとき持って帰ってくれ」といった。

「我ガ訳スル所ノ」

と、般若三蔵はいったが、厳密には牟尼室利三蔵といっしょに漢訳したものであった。いずれにせよ、経典を、その訳者そのひとから貰ったというのは、空海の歴史的な幸運といってよく、かれ自身もこの種の運のよさに、おそらく、この時期あたりから、神秘的な思いをもつまでになっていたにちがいない。

ついでながら、般若三蔵からもらったかれの所訳の経典は、新訳の『華厳経』一部四十巻。『大乗理趣六波羅蜜多経』一部十巻。『守護界主陀羅尼経』一部十巻。『造塔延命功徳経』一巻、などである。

さて、青竜寺の恵果和尚のことである。

牟尼室利三蔵もそうであったが、恵果もまた、その人生が終ろうとする最後の数ヵ月という時期に空海が出現する。恵果の死が、七ヵ月後の十二月十五日に訪れることを思うと、空海の運のよさのただごとなさに誰しも驚かざるをえないのではないか。

空海が長安に入る三十年前に死んだインド僧不空三蔵の密教の正系を伝承している者は恵果ひとりであるということはすでに触れた。密教には二つの思想（大日経系と金剛頂経系）があり、こ

の二つはインドにおいてべつべつに発生し、発達した。このことは何度も触れた。その二つを一人格のなかにおさめた人物はインドにもおらず、インドから唐へ渡るについても、それぞれの系統が、いわば恣意的に長安にきて、不空三蔵といえども金剛頂経系を知るのみであった（もっとも専門でないにせよ、不空は大日経系をも知っていたという説がある）。恵果は、大日経系のインド僧善無畏の弟子（新羅人玄超）から大日経系を承けていたから、両系の相伝者として密教世界ではただひとりのひとであった。

恵果の門人は一千人といわれた。

しかしながら、俊才にめぐまれなかった。大唐帝国は地広く人多く、俊才異能の人物も多かったが、かれらの多くは世を捨てずに儒教を学び、あるいは変り者は道士の弟子になり、さらには世を捨てて仏門に入る者も、かならずしも密教の門にのみ入らない。というよりも、密教はすでに道教に勢力を侵されて衰えはじめていた。もっとも密教の衰えの因は道教にのみあるのではなく、あまりにもインド的で思弁性のつよい密教は、なにごとにも具体性を好む中国人の思想的風土にやや適いがたかったということが基本としてあるであろう。

恵果は、多病になっていた。空海が入唐する前々年、自分の寿命のながくないことをさとり、義明ら七人の高弟を枕頭によんで法燈護持について遺言したということは、すでに触れた。ところが、義明をのぞいては恵果は両部をふたつながら伝えたわけではない。両部とはいうまでもな

く金剛頂経系と大日経系のことであり、言いかえれば金剛界の世界観と胎蔵界の世界観のことで、恵果がその両部を一身におさめた唯一の僧であることは繰りかえしのべた。恵果はその高弟たちに伝法するにあたってそのいずれか一つを授けたのみで、二つながらを授けたのは法臘（得度してからの年齢）主座の門弟である義明だけであった。ところがこの義明は空海が長安にあるときに死の床についていたか、それともこの前後に亡くなったかで、要するに、この時期の恵果のさびしさは、自分のすべてをゆずるに足る門人を持っていないということであった。空海は、そういう機に長安にきた。むろん、空海がもしこの翌年に長安に来たとすれば、恵果も義明もなく、大唐帝国には両部の灌頂の師はひとりもいないというはめになっていた。空海は、インド・中国をふくめた密教発達史上、きわめて得がたい機会に長安に入り、恵果に会ったということになる。

恵果の空海に対する厚遇は、異常というほかない。

空海をひと目みただけで、この若者にのみ両部をゆずることができると判断し、事実、大いそぎでそのことごとくを譲ってしまったのである。空海は日本にあってどの師にもつかず密教を独習した。恵果は空海を教えることがなかった。伝法の期間、口伝の必要なところは口伝を授け、印契その他動作が必要なところはその所作を教えただけで、密教そのものの思想をいちいち教えたわけでなく、すべて空海が独学してきたものを追認しただけである。空海の独学が的外れなものでなかったことを、この一事が証明している。

空海が恵果にはじめて会ったのは、繰りかえすようだが、五月である。あるいは下旬であった。恵果がすぐ来いというので、一時、居を青竜寺に移した。

伝法の儀式は、早くもその翌六月におこなわれているのである。日付もはっきりしている。六月十三日に胎蔵界の灌頂をうけた。七月上旬には金剛界の灌頂をうけて、両部の伝法をことごとく了えた。しかも八月十日には、密教世界の王位ともいうべき阿闍梨(あじゃり)の位をさずける伝法灌頂を恵果は空海に対しておこなったのである。空海は卒然とやってきて、恵果の門人の筆頭になっただけでなく、その教法の王位を継いだ。

このことは、他の門人の目からみても異常にうつったらしい。

「かれは何者であるか」

と、長安の密教僧として重い地位にある玉堂寺の珍賀などは大いに不満とした。というより、千人の門人の不満を、玉堂寺の珍賀は代表したのであろう。珍賀は、相当な高齢であったかと思える。その法系は、直接恵果に属しない。恵果とともに不空三蔵の弟子だった順暁という僧の弟子であった。法系がちがうために、恵果とは友達づきあいできる立場にあったらしく、おそらく恵果の弟子たちが、この玉堂寺の珍賀のもとに走って訴えたのかもしれない。珍賀は、ではおれがいってやる、として、恵果に毒づいた。珍賀にいわせれば、日本からやってきた僧というのは、

「コレ門徒ニアラズ。須(すべから)ク諸経ヲ学バシムベシ」

恵果和尚よ、かれはあなたの弟子ではないじゃありませんか、まず弟子として教えなさい、教えもせずに真言の正嫡とされるのはどういうことです、といった。

恵果は、これを斥けた。

恵果にすれば珍賀ごときに多くをいってもはじまらないと思ったか、ほとんど無言で頭を左右に振ったかのような感じがある。珍賀は憤然として座をしりぞいたが、ところが翌日朝、人変りがしたように自分の邪を悔い、恵果の門人たちを説いてまわって、師匠が正しかった、空海が正嫡の座につくことは正しい、それをさえぎろうとしたわしが間違っていた、わしは罪を怖れている、皆もふたたび不平の声を上げるな、と言い、一同をおどろかした。

ありようは、珍賀は夢を見た。恵果に苦情を言いに行った夜、夢に仏法の外護神である四天王があらわれ、珍賀をぶったり蹴ったりして、その足の下に踏みくだいてしまったらしい。珍賀は空海にも会い、まるで仏の宝前に進み出たように三度拝し、自分のあやまちを告白して詫びた。三拝したというのは、夢に出てきた四天王がよほどおそろしかったに相違なく、また四天王によって護られている空海に神聖を見出したからにちがいない。

この話は、空海がうそを言う人物でなかったから本当に珍賀がそう言ったのであろう。空海はうそをいう人ではなかったが、ただ謙虚な人ではなく、むしろ自讃する人であった。帰国後、弟子たちにこのことを話していたにちがいなく、このためにこの話が『御遺告』に採録されている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com